

【調査報告】

ナンタケット・スレイライド、 あるいは北米捕鯨史にかかわる一断想

浜 口 尚

1. はじめに

1972年、筆者が16歳、高校2年であった時、マウンテン (Mountain) の歌、「ナンタケット・スレイライド」(Nantucket Sleighride (To Owen Coffin)) を聴き(写真1)¹⁾、ナンタケット島の存在を知り、またこの曲が捕鯨を題材にした歌であることも漠然と理解した。もちろん、当時は「ナンタケット・スレイライド」の意味も、本曲が捧げられたオウエン・コフィンが誰であるかも知る由はなかった。本稿の冒頭に、フェリックス・パッパラルディ (Felix Pappalardi) と彼の妻ゲイル・コリンズ (Gail Collins) の手による歌詞の一部を掲げておく。

Goodbye, little Robin-Marie
Don't try following me
Don't cry, little Robin-Marie
'Cause you know I'm coming home soon

My ship's leaving on a three-year tour
The next tide will take us from shore
Windlaced, gather in sail and spray
On a search for the mighty sperm whale²⁾



写真1 マウンテンのCD「ナンタケット・スレイライド」のジャケット・イラスト

1973年8月、高校3年の夏休み、大学受験を幾分気にしながらも、大阪厚生年金会館大ホールで開催されたマウンテンのコンサートを楽しんだ(写真2)。レスリー・ウエスト (Leslie West) がギター・ソロで「ジングルベル」(Jingle Bells) を演奏、「このクソ暑い夏に、何でジングルベルなの?」と思ったことは、今でも記憶している。またフェリックス・パッパラルディがリード・ボーカルを取った「ナンタケット・スレイライド」も、ベース・ソロでの「さくらさくら」を含めて30分を超える演奏となり、これも「まだやるの。長いなあ…」と感じた。こう書くと、あまりよくなかったコンサートのようにも聞こえるが、そうではない。ただ、この二つが

想定外の出来事であったからである。



写真2 マウンテンのコンサート(1973年8月30日)の入場券

本公演の録音が、1974年にアルバム「ツイン・ピークス」(Twin Peaks)として発売されている(写真3)³⁾。今聴きなおしてみれば、「想像されたウエスタンのテーマ」(Theme for an Imaginary Western)や「ミシシッピー・クイーン」(Mississippi Queen)は、前者は元曲よりも洪く仕上がり、後者はライブならではの臨場感が出ており、歴史に残る録音に観衆の一人として参加できたことはいい思い出となっている。

本稿は、マウンテンの歌を聴きナンタケットと出会い、後に捕鯨文化研究に取り組み、何度となくナンタケットに再会するようになった筆者による北米捕鯨史の一側面をめぐる断想である。個人的感傷と学術的研究の混淆を肩肘張らずにご一読いただければ、筆者としては幸甚である。



写真3 マウンテンのCD「ツイン・ピークス」のジャケット・イラスト

2. 捕鯨文化研究への旅立ち

1991年2月、筆者は捕鯨文化研究のため、カリブ海にあるセント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国バクウェイ島を初めて訪れた(写真4)。その後もバクウェイ島での調査は続き、2019年3月の13回目の訪問で一区切りをつけた。その間、現地では計30頭のザトウクジラが捕殺され(写真5)、何度かそのおすそ分けを味わった。『国際捕鯨取締条約』(International Convention for the Regulation of Whaling)の枠組みの下では、2019年現在、ザトウクジラはバクウェイ島(年間4頭)とデンマーク領グリーンランド(年間10頭)でしか捕殺が許可されていないので(IWC 2018:3)、ザトウクジラを食せたことは貴重な経験であった。



写真4 ベクウェイ島風下側海岸（1991年）

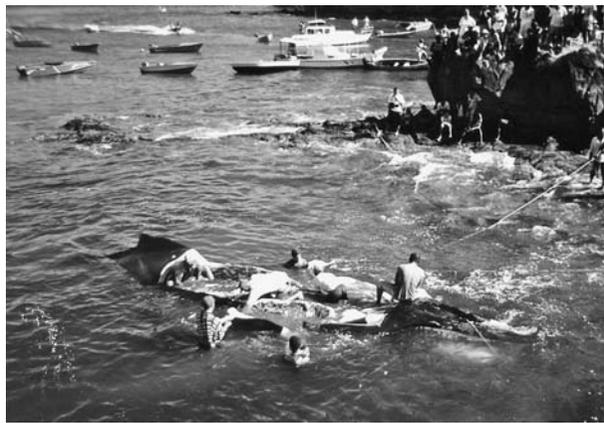


写真5 ザトウクジラの解体（1998年）

このベクウェイ島のザトウクジラ捕鯨は、アメリカ帆船式捕鯨の直接の影響を受けたものである。19世紀のほとんどを通して、アメリカ合衆国ニューイングランド地方を母港とする捕鯨船が、マッコウクジラ、ザトウクジラを追って定期的カリブ海地域を航行し、同地域の島々に立ち寄ったことが記録されている（Adams 1971 : 55）。グレナディーン諸島におけるアメリカ帆船式捕鯨は1860-70年代に最盛期を迎え、その時期に多くのベクウェイ島民が捕鯨船に雇用され、捕鯨技術を学び、1875-76年頃にベクウェイ島民による捕鯨が開始された（Adams 1971 : 60）。グレナディーン諸島における捕鯨ボートは、19世紀にベクウェイ島にもたらされた「ナンタケット型」（Nantucket-type）捕鯨ボートを模して建造されたもので、当時の全長は25-26フィート（7.6-7.9 m）で、アメリカの原型（28-30フィート）（8.5-9.1 m）よりは幾分か小さかった（Adams 1971 : 63）。

ここに2001年調査時、ベクウェイ島において用いられていた2隻の捕鯨ボートの写真を掲げておく。手前が「ホワイ・アスク」（Why Ask）（1983-2001年使用）、後方が「レスキュー」（Rescue）（1996-2013年使用）である（写真6）。両ボートとも全長27フィート（8.2 m）、幅7フィート（2.1 m）といわれていたが、浜に並べられた2隻を見比べてみると、後者の方が全体

的に幾分大きかった。ちなみに、後者の実測値は全長 8.25 m、幅 2.17 m であった（浜口 2016 : 95）。比較のため、アメリカ合衆国ニューベッドフォード捕鯨博物館に展示されていたナンタケット型捕鯨ボートの写真もあわせてご覧いただきたい（写真 7）。ほぼ同型であるのが、容易に理解できるであろう。



写真 6 浜に並べられた 2 隻の捕鯨ボート（ベクウェイ島、2001 年）



写真 7 ナンタケット型捕鯨ボート（ニューベッドフォード捕鯨博物館、2016 年）

1950 年代の終わり以降 2000 年に 79 歳で亡くなるまで、40 年以上にわたってベクウェイ島の捕鯨を率いてきた伝説的鉾手アスニール・オリヴェールさん（1921–2000 年）に何度か話をお伺いしたことがある。彼によれば、過去数十年間に、鉾を打ち込んだザトウクジラに捕鯨ボートごと海中に引き込まれたことや、進行方向を変えて捕鯨ボートに向かってきたザトウクジラの背中でボートが跳ね上げられ、ひっくり返されたこともあった。このような経験に基づいて、捕鯨活動中の転覆や沈没を避けるために、捕鯨ボートにも改良が加えられ、百数十年前の創業時よりも幾分大きく強固にされているのである（浜口 2016 : 96）。

この鉾を打ち込んだ鯨に捕鯨ボートごと海上を引っ張られていく状態が「ナンタケット・スレイライド」（ナンタケットのそり滑り）である（Clarke 1954 : 331）。クラークの論文を読んだ時には、漠然としか理解できなかったその意味が（浜口 1990 : 50 注 4 参照）、鯨捕りたちの体験を聞き、実感できたのであった。鯨に捕鯨ボートごと海上を引っ張られていくのは、昔も今もそれは怖いはずである。では、それはどれくらい怖いのか。アスニールさんによれば、「アフリカ

系の人々が、[血の気が引き] 白人になる」くらい怖いのである。

残念なことではあるが、アメリカ帆船式捕鯨の伝統を受継ぐ最後のナンタケット型捕鯨ボート「レスキュー」が2014年に、捕鯨のホエール・ウォッチングへの転換を主唱する反捕鯨団体に買収され、バクウェイ島の捕鯨とナンタケットとの直接の繋がりが絶たれてしまった（浜口2016:145）。2019年時点でも木造漁船を改装した2隻の捕鯨ボートによりザトウクジラ捕鯨は続けられ、同年3頭のザトウクジラが捕殺されたので、当面バクウェイ島の捕鯨が廃れることはないと思われるが、時代が変わったのは事実である。

時の流れとともに、旧知の鯨捕りの何人かは鬼籍に入り、何人かは引退した。筆者が同乗して捕鯨に出かけたボートも反捕鯨団体に買収された。これらのことが相まって、筆者はバクウェイ島での現地調査に一区切りをつけたのである。

3. 北米捕鯨史の一側面

1620年11月11日、イギリスからの移民を乗せたメイフラワー号が、現在のプロヴィンスタウン港に投錨した時、鯨が船を取り囲んだ（ドリン2014:33）。当時、現在のニューイングランド地方一帯の海には鯨が多数いたのである。従って、道具と技術と地理的条件に恵まれたならば、同地において捕鯨を実施することはたやすかったはずである。本章では、時を移してアメリカ帆船式捕鯨の中心地（そこはまたバクウェイ捕鯨の故郷でもある）となったニューイングランド地方のナンタケット（島）とニューベッドフォードを取り上げる（地図1）⁴⁾。



地図1 ナンタケット島、ニューベッドフォード周辺図

3.1 ナンタケット捕鯨史

アメリカ本土ケープコッド沖 38 km に位置する面積 119 km² の小さな島がナンタケット島である（フィルブリック 2003 : 7 ; 山下 2004 : 16）。1659 年 10 月、11 人のクエーカー教徒の入植を嚆矢としてイギリス人の入植が始まった（ドリリン 2014 : 78）。イギリス人が入植を始めた当時、島には約 2500 人の先住民が暮らしており、先住民は漂着鯨を利用していたといわれている（ドリリン 2014 : 80 ; 森田 1994 : 57）。ナンタケット島の入植者は、1690 年にケープコッドの住民から鯨の捕獲法、鯨油精製法を習い、捕鯨を始めた（ドリリン 2014 : 82）。

1690 - 1710 年代にかけての 20 年間、ナンタケット捕鯨は基本的には 6 人乗りの捕鯨ボートを用いて、海岸から 24 km 以内の水域で沿岸捕鯨を実施していた（森田 1994 : 58, 65）。1712 年頃、セミクジラを求めて沖に出た捕鯨船が、強風により遠くの外まで流されてマッコウクジラの群れに遭遇し、それらの捕獲に成功したとする伝説的な航海の後、ナンタケットでは沖合捕鯨、やがて遠洋捕鯨が優勢となり、主としてマッコウクジラを捕獲するようになった（ドリリン 2014 : 88 - 89, 114 - 115）。

1720 - 30 年代、6 か月航海が標準となり、ナンタケットの捕鯨船は、北はニューファンドランド沖、南はカリブ海まで進出、1740 年代にはアフリカ大陸コンゴ沖まで到達した（森田 1994 : 66 - 67）。このような捕鯨産業の発展、広域化に伴い、ナンタケットの捕鯨船数も 1715 年の 6 隻から 1748 年には 60 隻まで増加した（ドリリン 2014 : 115）。その一方、1760 年までにナンタケット島周辺では鯨はほぼ捕り尽されてしまった（フィルブリック 2003 : 21）。

1770 年代、ナンタケットの捕鯨船はブラジル沖、さらにはフォークランド諸島まで到達し、1771 - 75 年、捕鯨船数も 150 隻となった（森田 1994 : 67）。しかしながら、アメリカ独立戦争（1775 - 83 年）は、ナンタケットの捕鯨産業に大打撃を与えた。戦争の初めには 150 隻の捕鯨船を有していたが、その終わりには 30 隻以下となり、1000 人を超える乗組員の大部分は命を落とすか、捕虜となった（ドリリン 2014 : 204）。それでも残った捕鯨船は操業を続け、1791 年、ナンタケットの捕鯨船が、アメリカの捕鯨船としては初めてホーン岬を回って太平洋に入り、チリ近海で操業、1800 年代以降、チリ・ペルー沖から赤道を越え、北はパナマ湾、西はガラパゴス諸島まで進出していった（森田 1994 : 73）。

1815 年、ナンタケットから 25 隻の捕鯨船が出港し、1819 年までに 61 隻に増え、1820 年に 72 隻、1821 年には 90 隻に迫った（ドリリン 2014 : 259 - 260）。ナンタケットの捕鯨船団は 1830 年代から 1840 年代初めまでは成功を重ね、島の多くの鯨油精製工場とロウソク工場を大きく発展させたのであった（ドリリン 2014 : 262）。

もちろん、ナンタケット捕鯨産業の栄華の裏には、悲惨な出来事も数多くあった。1722 年から 1868 年までの 146 年間に捕鯨船 216 隻を事故で失っている（山下 2004 : 81）。その中には、海で亡くなった乗組員、無事生還できた乗組員もいる。生還できた乗組員にも様々な体験があったはずである。その大部分は歴史の中に忘却されてしまったが、今でも語り継がれているものもある。その一つが、1820 年に起こった「捕鯨船エセックス号の悲劇」である。以下、その物語

をナサニエル・フィルブリック著『復讐する海—捕鯨船エセックス号の悲劇』（2003年）から要約して掲げておく。

1819年8月12日、捕鯨船エセックス号、乗組員21人でナンタケットを出港。捕鯨活動中、南米大陸西岸の寄港地で乗組員1人が船から脱走。1820年11月20日、ガラパゴス諸島の西約2800kmの海上で、マッコウクジラに体当たりされ、エセックス号沈没。乗組員20人が3隻の捕鯨ボートに分乗し、南米大陸西岸をめざす。紆余曲折の末、漂流89日目の1821年2月18日、一等航海士ほか3名が救助され、漂流94日目の2月23日、船長ほか2名が救助された。4月9日、漂流中に立ち寄った無人島に残留していた3人も救出され、結局漂流した20人の乗組員のうち、8人がナンタケットに生還した。漂流中に9人が飢餓ほかの理由で死亡し、1隻のボートに分乗した3人は行方不明のまま。漂流中に死亡した9人のうち7人が、ボートで救助された5人の食料となった。仲間に食された7人のうちの1人は、食料用にくじ引きで選ばれ、殺害された。その時に殺害され、食料となったのがオウエン・コフィンであった。

文化人類学においては、「食人」は大きな研究テーマの一つとなっている。文化として、あるいは制度として食人が存在する（した）のか、否かについては、文化人類学者の間でも見解は分かれている。前者の立場を取るのがマーヴィン・ハリスであり（ハリス1988）、後者のそれはウィリアム・アレンズ（アレンズ1982）である。本稿のテーマは捕鯨であり、食人ではないので、この問題に深入りはしない。ただ、事件として、あるいは出来事として食人が繰り返り起こってきたことは事実である。具体的な事例への言及は差し控えるが、読者各位もすぐに何件かの食人の事例を思い起こすことができるであろう。マウンテンの歌「ナンタケット・スレイライド」が捧げられていたオウエン・コフィン、実は食人の犠牲者であったのである。

エセックス号の一件も忌まわしき事件として語り継がれているのか、それともやむをえない出来事として記憶されているのかは、実のところよくわからない。近年にはフィルブリックの原作に基づいて『白鯨との闘い』（2015年）として映画化もされているので、今でもこの一件に興味を抱く人が一定数はいるのであろう。筆者もDVD版を観賞したが（写真8）⁵⁾、ナンタケット捕鯨に関心を持つものとして、繁栄していた頃と思われるナンタケットの港や街の雰囲気を感じえたことは（どの程度忠実に再現されていたのかはわからないとしても）、価値があったと考えている。

栄枯盛衰は世の常である。栄華を誇ったナンタケット捕鯨にも必ず終わりはやってくる。1869年10月26日、ナンタケットを出港した捕鯨船が、結果的に最後に出港した捕鯨船となった（ドリン2014:267）。同船は太平洋において捕鯨に従事し、少量のマッコウ脳油と鯨油をナンタケットに送った後、1872年にパナマで売却された（ドリン2014:267, 518 注29）。1870年6月14日、ナンタケットに帰港した捕鯨船を最後にほぼ2世紀におよんだナンタケット捕鯨は幕を

下ろしたのであった (Trask 1994: 22)。



写真8 DVD版『白鯨との闘い』ジャケット・イラスト

3.2 ニューベッドフォード捕鯨史

ニューベッドフォードの捕鯨産業は、ナンタケットの捕鯨業者（資産家）が1768年に同地に鯨油を材料とするロウソク工場を建設して以降、発展していく（ドリン 2014: 146）。ニューベッドフォードがナンタケットを凌駕して捕鯨産業を拡大させた最大の理由は、その港のよさであった。ナンタケット港の出入り口の先には浅い砂洲があり、捕鯨船が大型化するとともに港への出入りに不自由をきたすようになったが、ニューベッドフォード港は水深が深く、大型の捕鯨船にも充分対応できたからである（ドリン 2014: 147, 229, 262–263）。

さらにナンタケットの森林は切り倒されていた一方、ニューベッドフォードは森林に囲まれ、捕鯨船を建造する材木を簡単に調達できたこと、また食料生産用の農地が十分あったこと、加えてニューベッドフォードはアメリカ本土に位置しているため、物資の入荷、鯨油やロウソクなどの製品の出荷に鉄道網を利用できたことなどもニューベッドフォードの発展要因であった（ドリン 2014: 147, 268）。

独立戦争（1775–83年）、米英戦争（1812–15年）は、アメリカ捕鯨産業全体に大きな被害を与えたが、米英戦争の終結から1850年代の終わりにかけて、同国捕鯨産業は大成長を遂げ、高い生産性と利益の時期を経験した（ドリン 2014: 258, 396）。アメリカ捕鯨産業が最高収益をあげた1853年、同国捕鯨船団は8000頭以上の鯨を捕殺し、1100万ドル以上の売上を記録している（ドリン 2014: 259）。このアメリカ捕鯨黄金時代の少し前に、捕鯨の中心地はナンタケットからニューベッドフォードに移っていたのであった。

捕鯨船数では1829年に、捕鯨収入では1842年に、ニューベッドフォードはナンタケットを凌駕している（Trask 1994: 21）。たとえば1838年、ナンタケットの捕鯨船が37隻であったのに対

して、ニューベッドフォードのそれは72隻を数えた(森田1994:100)。ニューベッドフォードの発展は、その人口推移からも読み取ることができる。19世紀初頭、4400人弱に過ぎなかった人口は、1860年には5倍強の2万2300人となっている(表1)⁶⁾。

このように米英戦争以降発展してきたニューベッドフォード捕鯨であったが、南北戦争(1861-65年)が同捕鯨に三度目の大打撃を与えた。捕鯨船団は海上から一掃され、南部連合の巡洋艦1隻が捕鯨船46隻を破壊したが、そのうちの25隻はニューベッドフォード船であった(Allen 1973:74)。また1859年にペンシルベニアにおいて石油が発見されたことも捕鯨産業に暗い影を落とした。翌1860年には石油生産量が鯨油生産量を追い抜き、1862年には石油生産量が300万バレルとなったのに対して、鯨油生産量は15万5000バレルに過ぎなかった(ドリン2014:437-438)。

南北戦争以降、下り坂に入ったニューベッドフォード捕鯨が最後に託したのが、ホッキョククジラから取れるクジラヒゲであった。19世紀半ば以降、女性の身体用コルセット向けにクジラヒゲの需要が急速に高まった(ドリン2014:458)。その結果、捕鯨の主要目的はクジラヒゲの採取に移行していった。1850年、ニューベッドフォードから83隻の捕鯨船が出港したが、そのうちの52隻は北極海でのホッキョククジラ捕鯨に向かっている(森田1994:94-95)。1855年、クジラヒゲの価格は1ポンド当たり45セントであったが、1870年には同85セント、1880年同2ドル、1891年には同5ドル38セントとなった(Allen 1973:87;ドリン2014:459)。まさにクジラヒゲ・バブルであった。

このクジラヒゲの恩恵もニューベッドフォード捕鯨にとってそう長くは続かなかった。1871年9月14日、北極海において氷盤に進路を阻まれたアメリカ捕鯨船団32隻は全船放棄を余儀なくされた。放棄した捕鯨船32隻の簿価が147万7000ドル、放棄した鯨油、クジラヒゲの価値が150万ドルであり、大きな損害となった。この捕鯨船32隻のうち21隻がニューベッドフォード船であった(Allen 1973:247-249)⁷⁾。

19世紀の第4四半期以降、アメリカ捕鯨船団は縮小期に入り、捕鯨船数は1870年321隻、1880年178隻、1890年97隻、1900年48隻、1914年には32隻となった(ドリン2014:467)。第一次世界大戦(1914-18年)終結後、ニューベッドフォードがアメリカに残された最後の捕鯨港となり、10隻に満たない捕鯨船が大西洋に出漁し、短期間操業するだけとなった(ドリン2014:473)。1927年、ニューベッドフォードから航海に出た捕鯨船を最後にアメリカ帆船式捕鯨は終焉を迎えたのであった⁸⁾。

表1 ナンタケット、ニューベッドフォード人口推移一覧

年	1800	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890
ナンタケット	5,617	6,807	7,266	7,202	9,012	8,452	6,094	4,123	3,727	3,268
ニューベッドフォード	4,361	5,651	3,947	7,592	12,087	16,443	22,300	21,320	26,845	40,783

年	1900	1910	1920	1930	1950	1970	1990	2000	2010	2018
ナンタケット	3,006	2,962	2,797	3,678	3,484	3,774	6,012	9,520	10,172	11,327
ニューベッドフォード	62,442	96,652	121,217	112,597	109,189	101,777	99,922	93,768	95,072	95,315

3.3 その後のナンタケット、ニューベッドフォード

ナンタケットでは捕鯨産業の衰退後、島に新しい産業が創出されず、経済は低迷した。1840年、人口は9000人を超えていたが、1900年に3000人台となり、1920年には2800人を割った(表1)。その衰退は「急激かつ徹底的であり、小規模な産業的革新もなかった」(Gambee 1993: 11)といわれている。しかしながら、結果的にそれがよかった。再開発が進まず、捕鯨時代の歴史的建造物や手つかずの海岸線などの自然環境がそのまま残され、現在はそれらを活かした観光の島、マリーナ・リゾート地となっている。

捕鯨で繁栄していた頃、ナンタケットでは階層により居住街区が異なっていた。船主や商人などの有産階級は埠頭から遠く離れた丘の上にあるプレザント・ストリートに居を構え、船長は港がよく見えるオレンジ・ストリート、航海士はその下にあるユニオン・ストリートに住んでいた(フィルブリック 2003: 26)。街には生還したエッセクス号の船長と一等航海士が暮らした家がまだ残っている(フィルブリック 2003: 289-290)。同じく、屋根上に「ルーフトップ・ウォーク」(rooftop walk)を備えた家々もそのままであり、かつてはその屋根上の展望所から、航海に出た夫の帰港を待つ妻が水平線を眺めていたのである(Gambee 1993: 86)。このようにナンタケットでは、街全体が捕鯨の歴史を現代に語り伝えているのである。

一方、ニューベッドフォードでは資本家たちが捕鯨産業で得た富を製造業など他の分野に投資し、経済発展を維持してきた。その中でも特筆すべきは綿織物工業であり、最盛期の1920年には織物工場が4万1380人の工員を雇用していた(Whitman 1994: 126)。当時の人口から計算すれば、住民の約34%が当該工場で働いていたことになる(表1)。労働可能でない老人や子供を除外した就労可能者だけに限れば、その割合はもっと高くなる。

現在のニューベッドフォードでは、捕鯨時代からの良港を活かした水産業(特にホタテガイ漁)が主要産業となり、ニューベッドフォード港は17年連続水揚げ高、全米一を記録、2016年の水揚げ高は3億2700万ドルとなっている⁹⁾。

近年、市の一角がニューベッドフォード捕鯨歴史公園として保存整備され、その中核施設として世界最大規模を誇る捕鯨博物館(写真9)が存在している。またニューベッドフォード公共図書館の正面入口に向かって右側には「銛手像」(写真10)、左側には捕鯨用の銛を鋳造した「鍛冶職人像」が建立されている。市民も来訪者もどこに行っても身近に捕鯨の歴史を感じられる街



写真9 ニューベッドフォード捕鯨博物館（2019年）



写真10 ニューベッドフォード公共図書館正面右側にある鋸手像（2019年）

づくりになっているのである。

本章の終わりに筆者の調査地ベクウェイ島とニューベッドフォードとのかかわりを記しておく。第2章において、2014年にベクウェイ島捕鯨のホエール・ウォッチングへの転換を主唱する反捕鯨団体が、同地に残る最後のナンタケット型捕鯨ボートを買収したことを取り上げた。同団体は2017年4月に稼働中の捕鯨ボートの所有者兼鋸手（捕鯨チームのリーダー）の息子をボストン、ニューベッドフォードに派遣、同息子はボストンではホエール・ウォッチングを体験し、ニューベッドフォードにおいては捕鯨博物館を訪問している¹⁰。当該反捕鯨団体は買収した最後のナンタケット型捕鯨ボートを「ベクウェイ島ボート博物館」に寄贈しており、現存する捕鯨を過去の遺物とすべく活動している。幸いにして、2019年時点では父は捕鯨に従事しており、息子の影響を受けていないが、同団体の活動には今後も注視していく必要がある。

ニューベッドフォード捕鯨博物館は捕鯨の歴史を現代に伝える優れた施設である。その一方、ベクウェイ島では実際に捕鯨が実施されている。筆者としては、捕鯨の歴史と捕鯨の現実、その双方を身近に体験できる社会環境を大切にしていきたいと考えている。

4. おわりに

本稿はマウンテンの歌「ナンタケット・スレイライド」を出発点として、筆者の調査地カリブ海ベクウェイ島に捕鯨技術を伝えたナンタケットを中心とするアメリカ合衆国ニューイングランド地方の捕鯨史の一側面を、個人的経験を踏まえうえて、まとめたものである。間断的ではあるが、29年間におよぶベクウェイ島での捕鯨文化調査に比して、ナンタケット、ニューベッドフォードを中心とするニューイングランド地方の捕鯨史研究は始めたばかりである。2020年に65歳になる筆者（1955年生）には、全長8m余りにすぎない捕鯨ボートに乗り、ザトウクジラ

捕鯨に同行する体力はなくなりつつあるが（正直しんどい）、捕鯨博物館所蔵の航海日誌などの捕鯨記録を読む気力はまだまだ残っている。

マウンテンのベーシスト兼プロデューサーで「ナンタケット・スレイライド」の作者の一人、フェリックス・パッパラルディ（1939年生）は1983年に、同曲の共作者でアルバム・ジャケットのイラスト（写真1、3）も担当した妻のゲイル・コリンズに夫婦喧嘩の末、射殺されている¹¹⁾。一方、ギタリストであったレスリー・ウエスト（1945年生）は糖尿病の悪化に伴い右足膝下部の切断手術を受けるも、車椅子に座って元気に演奏活動を続けている¹²⁾。2021年3月末をもって定年退職を迎える筆者であるが、レスリー・ウエストに倣ってもう少しだけ捕鯨文化研究を続けていくつもりである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17K03306 の助成を受けたものです。

注

- 1) Mountain, *Nantucket Sleighride*. Sony Music Entertainment, 1971 & 2003, SICP 30060. なお、原典 CD ジャケットはカラー印刷である。筆者は1972年当時、本作品をLPレコードとして購入している。
- 2) Nantucket Sleighride (To Owen Coffin) Lyrics. <https://www.lyrics.com/lyric/823209/Mountain> (accessed September 8, 2019).
- 3) Mountain, *Twin Peaks*. Sony Music Entertainment, 1974, SICP 4542. なお、原典 CD ジャケットはカラー印刷である。筆者は1974年当時、本作品をLPレコードとして購入している。
- 4) 地図1の出典は次のとおり。白地図専門店・三角形作成のフリーソフト白地図「マサチューセッツ州」(<http://www.freemap.jp/item/usa/massachusetts.html>. 2019年9月15日ダウンロード)を使用して筆者作成。
- 5) ロン・ハワード監督作品『白鯨との闘い』ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント、2015年。なお、原典 DVD ジャケットはカラー印刷である。
- 6) 表1の出典は次のとおり。Wikipedia, “Nantucket.” <https://en.wikipedia.org/wiki/Nantucket> (accessed September 17, 2019). “New Bedford, Massachusetts.” https://en.wikipedia.org/wiki/New_Bedford,_Massachusetts (accessed September 17, 2019).
- 7) ドリンは放棄された捕鯨船の総数を33隻、そのうちニューベッドフォード船を22隻としている（ドリン2014:450）。
- 8) New Bedford Whaling Museum, “Timeline - 1602 to Present.” <https://www.whalingmuseum.org/learn/research-topics/timeline-1602-to-present> (accessed September 17, 2019).
- 9) Wikipedia, “New Bedford, Massachusetts.” https://en.wikipedia.org/wiki/New_Bedford,_Massachusetts (accessed September 17, 2019).
- 10) *Searchlight*, May 23, 2017, “Vincentians Experience Whale Watching in Boston.” <http://searchlight.vc/vincentians-experience-whale-watching-in-boston-p65240-81.htm> (accessed May 29, 2017).
- 11) Johnny Black, April 17, 2014, “Felix Pappalardi Meets a Tragic End.” <https://www.loudersound.com/features/felix-pappalardi-meets-a-tragic-end> (accessed June 7, 2018).
- 12) Henry Yates, December 1, 2015, “In Conversation with Leslie West.” <https://www.loudersound.com/features/in-conversation-with-leslie-west> (accessed June 7, 2018).

文献

Adams, John Edward

1971 Historical Geography of Whaling in Bequia Island, West Indies. *Caribbean Studies* 11(3) : 55-74.

Allen, Everett S.

1973 *Children of the Light: the Rise and Fall of New Bedford Whaling and the Death of the Arctic Fleet*.
Carlisle, MA : Applewood Books.

アレンズ、W.

1982 『人喰いの神話—人類学とカニバリズム』(折島正司訳) 東京 : 岩波書店。

Clarke, Robert

1954 Open Boat Whaling in the Azores : the History and Present Methods of a Relic Industry. *Discovery Reports* 26 : 281-354.

ドリン、エリック・ジェイ

2014 『クジラとアメリカ—アメリカ捕鯨全史』(北條正司・松吉明子・櫻井敬人訳) 東京 : 原書房。

Gambee, Robert

1993 *Nantucket*. New York : W. W. Norton.

浜口 尚

1990 「クジラと暮らし—捕鯨文化の継承のために」『社会人類学年報』16 : 27-55.

2016 『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究—国際捕鯨委員会の議論とカリブ海バクウエイ島の事例を中心に』 東京 : 岩田書院。

ハリス、マーヴィン

1988 『食と文化の謎—Good to eat の人類学』(板橋作美訳) 東京 : 岩波書店。

IWC (International Whaling Commission)

2018 Annex P : Amendments to the Schedule Adopted at the 67th Meeting. IWC 67-RS 7592, 3 pp.

森田勝昭

1994 『鯨と捕鯨の文化史』名古屋 : 名古屋大学出版会。

フィルブリック、ナサニエル

2003 『復讐する海—捕鯨船エセックス号の悲劇』(相原真理子訳) 東京 : 集英社。

Trask, George Graham

1994 *Nantucket Island Guidebook*. Beaufort, SC : Coastal Village Press.

Whitman, Nicholas

1994 *A Window Back : Photography in a Whaling Port*. New Bedford, MA : Spinner Publications.

山下涉登

2004 『捕鯨Ⅱ』(ものと人間の文化史 120-Ⅱ) 東京 : 法政大学出版局。

[はまぐち ひさし 文化人類学]